郡山市立小原田中学校
学校だより
No.47

手をたずさえて

“小原田PRIDE”～自信と誇り

- 心身ともに健康で明朗な生徒
- 自主的に学習する生徒
- 責任を重んじ協調性のある生徒

令和４年２月１７日（木）発行
【発行責任者】郡山市立小原田中学校長　熊 坂　　洋

県立高校前期選抜に挑む3年生へ

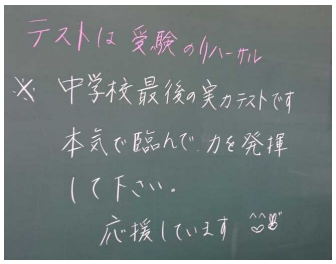
“緊張感”と“人事を尽くして天命を待つ”ということ

県立高校前期選抜の最終倍率が出ました。“覚悟”を決めて、３月３日までの十数日間を“一日一生”の想いをもって有益に過ごしてください。高校入試、大学入試、就職（採用）試験等、人生の節目には試験があります。そして、この試験には、「緊張」がつきものです。緊張しない人なんてほとんどいないのではないでしょうか。しかしながら、極度の緊張で本来の実力が発揮できなかった、という事態だけは避けたいものです。そのためにも、発想の転換が必要です。

まずは、「緊張するのはよくないこと」という思い込みを捨てましょう。緊張は生物に備わっている自然の反応なのです。無理に緊張しないようにすると不自然になります。緊張すること自体は悪いことではないどころか、必要なことなのです。例えば「緊張」という言葉に「感」という一文字をつけてみてください。たった一文字足して『緊張感』にしただけで、マイナスイメージがプラスイメージに一転します。『緊張感がある』ということは好ましい状態のことですし、『緊張感』がないというのはマイナスとして捉えられます。人は大事な局面で『緊張感』を持って事に当たる人を好ましく思うものです。緊張は消し去るものではなく、上手に付き合って味方にするべきものです。緊張は過剰になると冷静さを欠いて失敗を招きますが、コントロールすることができるようになると強い味方になってくれます。緊張は消し去るべき恐れる対象ではないということ。味方につけて生かすことで、自分のふだん以上の力を発揮することもできるのです。

そして、もう一つ『人事を尽くして天命を待つ』という気持ちも大切です。『人事を尽くして天命を待つ』とは、「ベストを尽くしたあとは、心を静かにして運を天に任せる」という心境をたとえる言葉です。自分自身を落ち着かせるために、ぜひそのような心境であるべきだと言い聞かせてみてください。

特に体調管理と感染症対策には細心の注意を払うとともに、最後まで決してあきらめないことです。最後の最後までベストを尽くしてください。受験生たちの健闘を心から祈っています！



最後の実力テストに挑む３年生

SSS 色川さんありがとうございました！

スクール・サポート・スタッフ（ＳＳＳ）として、５月から本校に勤務されていた色川千尋さんが２月17日（木）をもって勤務が終了となりました。色川さんには、新型コロナウイルス感染症対策として、校内の消毒作業を中心に、その他印刷や教材づくりのお手伝いなど、多方面にわたって学校の縁の下の力持ち的存在として職務にあたっていただきました。我々教職員もたくさん助けられました。心より感謝申し上げます。来年度もＳＳＳの配置が検討されているとのことで、またご縁があればと願っているところです。色川さんから、生徒のみんなへのメッセージです。

この度、２月17日をもちましてスクール・サポート・スタッフの契約が満了しました。短い間ではありましたが、大変お世話になりました。

廊下ですれ違う時に明るく元気に挨拶をしてくれたこと。作業をしている時に、「手伝いますか？」と声をかけてくれたこと。とても嬉しかったです。文化祭では、みなさんの本気で取り組む姿、美しい歌声に涙も出ました。貴重な経験をさせて頂き、本当にありがとうございました。

３年生からの花束贈呈

“不易流行”～読書のすゝめ～

郡山市学校図書館協議会が発行している市学校図書館協議会だより『える・あい Ｎｏ．２』に掲載された本校３学年主任：小林桂子先生の〈随想〉です。

「紙の本について」

小原田中学校 教諭 小林 桂子

冬休み。帰省。久々に合う実家の母、伯父とともに、家族みんなで、「回る」お寿司屋さんへ。娘が物心ついた頃からだから、かれこれ１０年以上の恒例行事。娘がお寿司のネタだけ食べてシャリを残していたあのころ、生魚よりもハンバーグのお寿司を好んでいたあのころ…、なつかしい思い出がよみがえる。でも、今はもうお寿司がぐるぐる回っていたなつかしい光景はなく、各席に用意されたタブレットで注文をする。お寿司を運ぶ新幹線が席の往復を繰り返す。それは結構前からのシステムだけど、今回はとうとう紙のメニューがなくなってしまっていた。時代だからかＳＤＧｓだからかコロナだからか、仕方がないのかもしれない。でも、タブレットを持っている一人しかメニューを見られないというのは注文するのに不便であるし、ちょっと寂しい気もした。額をつきあわせて、紙のメニューを見ながらわいわい言い合うのが、みんなで外食するときの楽しみや思い出の一つにもつながっていたように思う。

自分がそういった機器関係が苦手で抵抗をもっているからかもしれないが、それはそれとしても、紙のものが減っていくというのは寂しいなと思う。本もそうだ。手軽な電子書籍の台頭によって紙の本の未来が憂えられたり、教育現場でもタブレット使用の推奨がなされ、学校図書館での本を使った調べ学習の機会が少なくなったりしている。

図書館や書店で、たくさんの本に囲まれる雰囲気を味わう。じっくり本を探している人々の様子をうかがう。紙の手触りやにおいに触れる。目当てではなかった本が目に飛び込んできて、思わず手に取って開いてみる。新しい発見がある。電子機器では味わえないたくさんの感覚を、紙の本は提供してくれる。学校でも、ちょくちょく図書館に足を運んでくれる生徒はほとんど決まっていて、大半は読書よりもゲームに熱中している。これからを生きる生徒たちには、自分の好きなものだけを好きな人とやり取りするのではなく、自分が知らなかったことに触れたり新しい考え方を身につけたりして、豊かな深い人間になってほしいと思う。そのためにも、読書のしかたを含め、今の時代の中でできることを考えていきたい。

小林先生の〈随想〉には、図書館や書店の雰囲気、紙の本の手触りやにおいなど、共感できるところがたくさんありました。読書は、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をよりよく生きる上で欠くことのできないものと言われています。頭では理解していても、実際に読書となると、なかなか行動に移せない、そんな人もいることでしょう。ましてや、今はネット社会で、ゲームやＳＮＳの方に興味関心が向いている人も多いと思います。電子書籍なるものも一般化し、スマホがあれば読書もできる時代になりました。でも、液晶画面をなぞるのではなく、紙のページを１枚１枚めくりながら活字を読むことも、時にはいいものだと思います。

「不易流行（ふえきりゅうこう）」という言葉があります。これは、いつまでも変わらないことを指す「不易」と、時代に応じて変化することを示す「流行」という相反する概念がひとつになった言葉で、昔から変わらないものを理解して基礎を作り、その上で、新しいものを積極的に取り入れて考え方などをアップデートさせることを意味します。今、各教科の授業では、タブレットが積極的に活用されています。生徒達も文房具の一部のように使いこなしています。しかしながら、黒板の板書事項をノートにまとめたり、自主学習ノートづくりに工夫しながら取り組んだりすることも大切なことです。このノートづくりと同様、紙のページを１枚１枚めくりながら活字を読む“読書”はまさに「不易」であり、大切にしていきたいものです。“良書”との出会いが、やがてその人の財産になるということもよくあります。３年生も受験が終わったら、ぜひこの“読書のすゝめ”を受け入れ、実行してください。

2年大原さん 優秀選手賞受賞！

２年大原寧々さんがフィギュアスケート競技の東北大会での活躍が認められ『郡山市小中学生優秀選手賞』を受賞しました。

毎年、県大会以上の各種スポーツ大会で、優秀な成績を収めた市内の小中学生が対象となり、メダルが授与されます。受賞おめでとうございました。更なる飛躍を祈っています。